

II. 試験結果概要

1. 動物体内運命試験

オリサストロビンのフェニル環及び 1-methyl 基並びに butylidene 基 (側鎖) の両部分を ^{14}C で標識したもの (^{14}C -オリサストロビン) を用いて代謝試験が行われた。放射能濃度及び代謝物濃度はとくに断りがない場合、オリサストロビンに換算した (他の代謝試験も同様)。

^{14}C -オリサストロビンを 25 (低用量) ~250 (高用量) mg/kg 体重の用量で単回経口投与し、オリサストロビンのラットを用いた動物体内運命試験が行われた。

投与後 168 時間で、尿中に投与量の 58.0~60.4%、糞中に 28.6~37.9%、呼気中に 3.8~5.6% 排泄された。48 時間後までの胆汁中排泄は、低用量投与群の雌雄及び高用量投与群の雄で 71.1~74.3%、高用量投与群の雌で 45.8% であった。オリサストロビンは投与量の 84.9~94.3% が投与後 48 時間で排泄された。胆汁中及び尿に排泄された放射エネルギーが投与量の 100% 以上であることから、オリサストロビンの消化管吸収率は極めて高く、ほぼ全量が吸収されているものと考えられた。また、胆汁排泄された放射能の約 50% が消化管から再吸収され、腸肝循環されていることが示唆された。

血漿中放射能の最高濃度 (C_{\max}) は、低用量投与群 (25mg/kg 体重) で 1 時間後 (T_{\max}) に 4.61~7.04 $\mu\text{g/g}$ 、中用量投与群 (80mg/kg 体重) で 8 時間後に 11.5~16.0 $\mu\text{g/g}$ 、高用量投与群 (250mg/kg 体重) で 24 時間後に 21.6~25.9 $\mu\text{g/g}$ であった。半減期 ($T_{1/2}$) は二相性を示し、低用量投与群で 7.9~10.5 及び 33.8~35.2 時間、中用量投与群で 7.3~9.5 及び 37.8~41.7 時間、高用量投与群で 12.1~15.3 及び 31.9~35.4 時間であった。

オリサストロビンの低用量及び高用量投与群の主な組織の残留放射能は表 1 のとおりであった。(参照 2)

表 1 主な組織の残留放射能 ($\mu\text{g/g}$)

		血漿中最高濃度到達時*	投与 168 時間後
低 用 量	雄	胃(224), 腸管(80.4), 肝臓(43.6), 脾臓(17.1), 腎(14.4), 副腎(9.28)	全ての組織で 1.5 以下
	雌	胃(287), 腸管(139), 脾臓(27.3), 肝臓(18.8), 甲状腺(16.9), 副腎(15.7), 卵巣(13.0), 子宮(10.4)	
高 用 量	雄	腸管(153), 甲状腺(29.4), 胃(26.3), 肝臓(27.6), 脾臓(24.5), 腎(23.1), 副腎(17.8)	全ての組織で 13.2 以下
	雌	腸管(144), 卵巣(54.1), 子宮(48.3), 肝臓(32.7), 甲状腺(29.5), 胃(24.4), 腎臓(22.3), 副腎(21.6)	

※ 低用量：投与 1 時間後、高用量：投与 24 時間後

尿中排泄物からはオリサストロビンは検出されず、主要代謝物として F010¹、F014、F007 及び F002 が、投与後 48 時間後までにそれぞれ投与量の 5.1~7.7、0.8~2.1、1.1

¹ : 代謝物等の略称は別紙 1 を参照 (以下同じ)。

～6.4 及び 0.5～7.2%検出された。糞中代謝物(低用量 0～24 時間後、高用量 0～48 時間後)からは、オリサストロビンが 0～2.0%検出され、主要代謝物として F008、F015、F014 及び F044 が 0.8～1.7、0.4～1.1、0.5～1.3 及び 0.5～1.0%検出された。胆汁中からはオリサストロビンは検出されず、主要代謝物として F019 及び F022 (いずれもグルクロン酸抱合体) が 6.3～10.3 及び 5.5～7.8%検出された。肝臓中及び腎臓中からの代謝物としては、尿及び胆汁代謝物の多くが含まれ、いずれも 0.3%以下であった。

オリサストロビンの主要代謝経路は、①オリサストロビンの側鎖とビオフォア部位(メトキシイミノ-*N*-メチル-アセトアミド-置換フェニル環)の脱メチル化、残存メチル基の水酸化、これらの代謝物のグルクロン酸抱合体化、②オリサストロビンの側鎖におけるメトキシイミノ基のケトン化、第二のメトキシイミノ基も酸化された後のジオール体への還元、続いて側鎖の開裂後、生成したアルデヒドの酸化によるカルボン酸代謝物の生成、③オリサストロビンのオキシムエーテル結合が開裂し、ビオフォアであるベンジル環を含む代謝物の生成であると考えられた。(参照 3)

2. 植物体内運命試験(水稻)

¹⁴C-オリサストロビンを用いて水稻(品種:コシヒカリ)における植物体内運命試験が実施された。試験稲は育苗箱で育て、ワグネルポットに移植したものを扱い、育苗箱処理 1 回、田面水処理を 2 回及び茎葉散布 1 回を含む体系処理区(処理区-1)と育苗箱処理のみの区(処理区-2)を設けた。育苗箱処理では 1000g ai/ha、田面水処理では 750g ai/ha、茎葉散布では 300g ai/ha を処理した。育苗箱処理では、粒剤からの有効成分の溶出を想定して処理液を 8 回に分けて処理したため育苗箱での処理は 1 回目のみであり、残り 7 回は移植後に行った。

処理区-1 では、移植 1 日後、2 回の田面水散布 25 日後(茎葉散布前)及び茎葉散布 16 日後(収穫期)に、処理区-2 では模擬育苗箱処理の最終処理 33 及び 70 日後(収穫期)に採取した。

移植後 27、59 及び 83 日後(最終散布前)に採取した稲体のオートラジオグラフィーの結果から、オリサストロビンは根から吸収され、地上部に容易に移行するが、穂への移行性は茎葉よりも少なかった。処理区-1 では、籾中で 5.23mg/kg、玄米中で 1.22mg/kg、わら中で 31.4mg/kg の残留放射能(TRR)が検出された。籾中ではオリサストロビンが 51.7%TRR、F001(オリサストロビンの *EZE* 異性体)が 17.0%TRR、抽出残渣が 21.0%TRR、玄米中ではオリサストロビンが 35.1%TRR、F001 が 6.3%TRR、抽出残渣が 18.3%TRR、わら中ではオリサストロビンが 42.6%、F001 が 17.2%TRR、抽出残渣が 8.4%TRR、籾及びわら中には、その他の代謝物として F026、F025 及び F027、F028、F029 の *E-Z* 異性体、F030 及びその異性体が検出された。処理区-2 では、籾中に 0.163mg/kg、わら中に 1.21mg/kg の残留放射能が検出された。籾中では抽出残渣が 56.9%TRR で、オリサストロビンが 5.6%TRR、F001 が 2.6%TRR、わら中では抽出残渣が 16.0%TRR で、オリサストロビンが 21.4%TRR、F001 が 11.3%TRR、その他の代謝物として籾中及びわら中に F025、F026 及び F027、F028、F029 の *E-Z* 異性体、F030 及びその異性体が検出された。

オリサストロビンの主要代謝経路は、①ブチリデン部位のメトキシイミノ基の脱メチ

ル化により、F027 を生成し抱合体を形成するほか、アセトアミド部位の *N*-メチル基の脱メチル化による F029 の生成及び、続く抱合体の形成②オリサストロビンのアセトアミド部位の *N*-メチル基の水酸化による F028 の生成、③オリサストロビンの 6-メトキシイミノ基の脱メチル化及び 6-メチル基の水酸化による F026 の生成、④オリサストロビン及びその代謝物の *E-Z*異性体の生成と考えられた。

これらの代謝物はさらに代謝され、最終的には蛋白質、炭水化物、セルロース、リグニンなどの天然物に取り込まれると考えられる。(参照 4)

3. 土壌中運命試験

オリサストロビンのフェニル環を ^{14}C で標識したもの (Phe- ^{14}C -オリサストロビン) 又は 1-methyl 基及び butyliden 基の両側を標識したもの (Side- ^{14}C -オリサストロビン) を用いて土壌中運命試験が行われた。

(1) 好氣的湛水土壌中運命試験 (その 1)

Phe- ^{14}C -オリサストロビン及び Side- ^{14}C -オリサストロビンを用いて、ドイツのシルト質砂土に乾土あたり各 1.5mg/kg の濃度で水面に添加後、好氣的湛水条件下、 $25\pm 1^\circ\text{C}$ の暗所で 182 日間インキュベーションしてオリサストロビンの土壌中運命試験が実施された。

両標識体の水相の放射能は減少し、182 日後には総処理放射能 (TAR) の 12.3~14.6% であった。182 日後の土壌における抽出可能放射能は 62.2~70.3%TAR、抽出不能放射能は 10.5~11.5%TAR であった。累積の $^{14}\text{CO}_2$ は 3.4~7.8%TAR であった。

水相中放射能の大部分がオリサストロビンであり、放射能は経時的に水相から土壌に移行し、試験開始時は 79.3~85.4%TAR、182 日後には 10.1~10.9%TAR であった。土壌中放射能の大部分もオリサストロビンであり、試験開始時に 6.3~8.9%TAR、30 日後に最高値で 58.2~58.8%TAR、182 日後には 47.4~53.7%TAR が検出された。試験時にはオリサストロビンのほか、3 種類の異性体以外に多くの変化生成物が検出されたが、いずれも 2.5%TAR 未満であり、多くは 0.1~1.0%TAR であった。なお、3 種類の異性体は試験に用いた標識化合物に含まれていた可能性が高いと考えられた。

オリサストロビンの水中での半減期は 6 日、土壌中では 318 日、試験系全体で 313 日であった。(参照 5)

(2) 好氣的湛水土壌中運命試験 (その 2)

Phe- ^{14}C -オリサストロビン及び Side- ^{14}C -オリサストロビンを用いて、国内の軽埴土の土壌に乾土あたり各 1.5mg/kg の濃度で田面水に添加後、好氣的湛水条件下及び好気条件下、 $25\pm 2^\circ\text{C}$ の暗所で 84 日間インキュベーションしてオリサストロビンの土壌中運命試験が実施された。

Phe- ^{14}C -オリサストロビンでは、好氣的湛水土壌試験系において、土壌中のアセトン抽出放射能が経時的に減少し、84 日後には TAR の 72.3%、田面水放射能は 16.9%TAR であった。田面水及び土壌中から抽出された放射能の主成分はオリサストロビンであった。Phe- ^{14}C -オリサストロビンに特有の分解物としてオリサストロビンの側鎖部位が開

裂した F011 及び F011 が酸化されて生成したアルデヒドが閉環した F032 も同定され、84 日後は両者合わせて 0.92% TAR であった。好気土壌試験系ではアセトン抽出放射能は 84 日後に、97.6% TAR、抽出残渣放射能は 84 日後に 6.52% TAR であった。土壌中から抽出された放射能の主成分はオリサストロビンであり、95.5% TAR であった。

Side-¹⁴C-オリサストロビンでは、好氣的湛水土壌試験系において、75 日後にアセトン抽出放射能は 73.0% TAR、田面水放射能は 16.1% TAR、抽出残渣放射能は 8.35% TAR であった。好気土壌試験系ではアセトン抽出放射能は 84 日後に 96.5% TAR、抽出残渣放射能は 6.57% TAR であった。田面水及び土壌中の放射能パターンは Phe-¹⁴C-オリサストロビンと類似しており、抽出された放射能の主要成分はオリサストロビンであり、81.2~91.3% TAR であった。

オリサストロビンの好氣的湛水土壌試験系における半減期は 294 日であった。

オリサストロビンの土壌中での分解経路は、オリサストロビンが側鎖部位で開裂して F011 が生成し、F011 がアルデヒド酸化され、アルデヒドが環状になることで F032 が生成すると考えられた。(参照 6)

(3) 土壌吸着試験

土壌吸着試験を 4 種類の土壌 [2 種類の埴壤土 (国内及び米国)、微砂質壤土 (米国)、微砂質埴土 (国内)] を用いて行った。

Freundlich の吸着係数 K_F は 1.40~3.79、有機炭素含有率により補正した吸着係数 K_{Foc} は 17.9~146 であった。(参照 7)

4. 水中運命試験

(1) 加水分解試験

Phe-¹⁴C-オリサストロビンを pH4.0 (0.01mol/L クエン酸緩衝液)、pH5.0 (0.007mol/L 酢酸緩衝液)、pH7.0 (0.01mol/L リン酸緩衝液)、pH9.0 (0.01mol/L 塩化カリウム/ホウ酸緩衝液) の各緩衝液に濃度 5mg/L になるように加え、25±1°C において 30 日間インキュベーションし、オリサストロビンの加水分解試験が行われた。

本試験条件下では分解は認められなかった。30 日後に抽出された放射能の主要成分はオリサストロビンであり、95.7~98.0% TAR であった。推定半減期は 1 年以上であり、オリサストロビンは加水分解的に安定であると考えられた。(参照 8)

(2) 水中光分解運命試験

Phe-¹⁴C-オリサストロビンを pH7 の滅菌した 0.01mol/L リン酸緩衝液及び田面水に濃度 5mg/L になるように加え、25±1°C で 14 日間キセノン光照射 (290~800nm の範囲で 152.0W/m² : 太陽光換算約 28 日) し、オリサストロビンの水中光分解試験が行われた。

緩衝液及び田面水において抽出された放射性物質のうち、オリサストロビンは 1 日後に 47.4~52.0% TAR、14 日後に 18.2~21.1% TAR に減少した。分解物は、F001、F033、F049、F011 及び F032 が、緩衝液でそれぞれ最大 26.1% TAR (3 日後)、12.7% TAR (7 日後)、12.4% TAR (7 日後)、5.75% TAR (14 日後) 及び 5.77% TAR (14 日後)、田面水でそれぞれ最大 28.3% TAR (3 日後)、10.4% TAR (7 日後)、10.7% TAR (7 日後)、5.58% TAR (14 日

後)及び3.34% TAR(14日後)検出された。分解物 F001、F033 及び F049 はオリサストロビンの幾何異性体であった。オリサストロビンは二相性を示して減衰し、第 2 相の緩衝液及び田面水における半減期は 1.1 及び 0.8 日であり、太陽光に換算した半減期は 2.2 及び 1.7 日であった。なお、暗所対照区では緩衝液区及び田面水区ともに 14 日間の試験期間中での分解は認められなかった。

オリサストロビンの水中光分解経路としては、第一段階としてオリサストロビンの幾何異性化が起り、次に第二段階として、側鎖部位の脱離が徐々に起き、F011 や F032 等多くの光分解物が生成されると考えられた。(参照 9)

5. 土壌残留試験

火山灰壌土、洪積軽埴土、沖積埴壌土を用いて、オリサストロビン及び分解物(変化生成物; F001 及び F033)を分析対象化合物とした土壌残留試験(容器内及び圃場)が実施された。その結果は表 2 のとおりであり、推定半減期は、オリサストロビンが 51.2~249 日、オリサストロビンと分解物の含量で 53.1~258 日であった。(参照 10)

表 2 土壌残留試験成績(推定半減期)

試験	土壌	オリサストロビン	オリサストロビン +分解物
容器内試験	火山灰壌土	198 日	207 日
	洪積軽埴土	249 日	258 日
圃場試験	火山灰壌土	51.2 日	53.1 日
	沖積埴壌土	58.2 日	61.7 日

6. 乳汁への移行試験

ホルスタイン種の泌乳牛 2 頭を用いて、オリサストロビン (3.56 mg/頭/日)、代謝物 F001(0.52 mg/頭/日)及び F033(0.16 mg/頭/日)を 7 日間連続経口投与による乳汁移行試験が実施された。なお、オリサストロビンの乳牛への投与量は、稲わらにオリサストロビン、2 種類の変化生成物 F001 及び F033 の最大残留濃度 0.89、0.04 及び 0.14 mg/kg の 2 倍量が残留し、乳牛に稲わら 2 kg/日が与えられるとして計算された。

投与開始 1 日後から最終投与 5 日後まで、搾乳した試料からオリサストロビン、代謝物 F001 及び F033 は検出されなかった。(参照 11)

7. 作物残留試験

水稻(玄米及びわら)を用いて、オリサストロビン、代謝物 F001 及び F033 を分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。その結果は表 3 のとおりであり、玄米中の最大の残留値は育苗箱に 50 g ai/箱及び本田に 990g ai/ha で 2 回散布し、最終散布後 21 日目に収穫したとき 0.052 mg/kg であったが、31、48 及び 129 日目にはそれぞれ 0.041、0.033 及び 0.024 mg/kg と減衰した。稲わら中の最大残留値は 1.68 mg/kg であった。代謝物 F033 は玄米中から検出されなかった。(参照 12,13)

表 3 作物残留試験成績

作物名 実施年	試験 圃場数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)					
					オリサストロビン		F001		F033	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
玄米 2001, 2003年	4	3.5g ai/箱 +990(本田)	2	21	0.052	0.025	0.007	0.005	<0.005	<0.005
			2	28~33	0.041	0.026	0.006	0.005	<0.005	<0.005
			2	40~58	0.033	0.026	0.007	0.005	<0.005	<0.005
	2	3.5g ai/箱 +990(本田)	2	119~129	0.024	0.014	0.006	0.005	<0.005	<0.005
稲わら 2001, 2003年	4	3.5g ai/箱 +990(本田)	2	21	1.68	0.71	0.24	0.09	0.12	0.04
			2	28~33	0.89	0.49	0.15	0.08	0.05	0.03
			2	40~58	0.53	0.36	0.12	0.07	0.03	0.02
	2	3.5g ai/箱 +990(本田)	2	119~129	0.25	0.15	0.07	0.04	<0.02	<0.02

注) ai : 有効成分量、PHI : 最終使用-収穫間隔日数

- ・一部に検出限界以下 (<0.005 及び <0.02) を含むデータの平均値は 0.005 及び 0.02 として計算した。
- ・全試験に粒剤を用いた。
- ・代謝物の残留値は親化合物に換算した値を記載した。

上記の作物残留試験に基づき、オリサストロビン及び *EZE* 異性体 (代謝物 F001) を暴露評価対象化合物として農産物から摂取される推定摂取量を表 4 に示した。なお、本推定摂取量の算定は、予想される使用方法からオリサストロビン及び代謝物 F001 の合計が最大の残留を示す使用条件で、全ての適用作物に使用され、加工・調理による残留農薬の増減が全くないとの仮定の下に行った。

表 4 食品中より摂取されるオリサストロビンの推定摂取量

作物名	残留値 (mg/kg)	国民平均		小児 (1~6 歳)		妊婦		高齢者 (65 歳以上)	
		ff (g/人/日)	摂取量 (μ g/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μ g/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μ g/人/日)	ff (g/人/日)	摂取量 (μ g/人/日)
米	0.031	185.1	5.7	97.7	3.0	139.7	4.3	188.8	5.9
合計			5.7		3.0		4.3		5.9

注) ・残留値は、予想される使用時期・使用回数のうちオリサストロビン及び代謝物 F001 の合計が最大を示す試験区の平均値を用いた (参照 表 3)。

- ・「ff」: 平成 10 年~12 年の国民栄養調査 (参照 54~56) の結果に基づく農産物摂取量 (g/人/日)
- ・「摂取量」: 残留値及び農産物摂取量から求めたオリサストロビンの推定摂取量 (μ g/人/日)

8. 一般薬理試験

マウス及びラットを用いた一般薬理試験が実施された。表 5 にその総括を示す。

(参照 14)

表5 一般薬理試験

試験の種類	供試生物	一群あたり供試数	投与量 (mg/kg 体重)	無作用量 (mg/kg 体重)	作用量 (mg/kg 体重)	概要	
中枢神経系	一般状態	マウス	雌雄 3 匹	0,128,320,800,2000	800	2000	2000mg/kg 体重投与群の雌雄に呼吸数の減少、雄に自発運動の低下、よろめき歩調がみられ、雄マウス 1 例が死亡した。
		ラット	雄 5 匹	0,320,800,2000	320	800	800 mg/kg 体重以上投与群で下痢がみられた。2000mg/kg 体重投与群では体重増加抑制がみられ、2 例死亡。
	ヘキサバルビタール睡眠	マウス	雄 8 匹	0,51.2,128,320,800,2000	51.2	128	睡眠時間延長がみられた。2000mg/kg 体重投与群で 1 例死亡。
	体温	ラット	雄 5 匹	0,320,800,2000	800	2000	投与 6 時間後に体温低下がみられた。
循環器系	血圧、心拍数	ラット	雄 5 匹	0,320,800,2000	800	2000	影響なし。 2000mg/kg 体重投与群で 1 例死亡。
自律神経系	瞳孔径	ラット	雄 5 匹	0,320,800,2000	2000	-	影響なし。
消化器	炭末輸送能	マウス	雄 8 匹	0,20.5,51.2,128,320,800,2000	800	2000	影響なし。 2000mg/kg 体重投与群で炭末投与前に 3 例死亡。
骨格筋	握力	ラット	雄 5 匹	0,320,800,2000	2000	-	影響なし。
腎機能	腎機能	ラット	雄 5 匹	0,128,320,800,2000	128	320	320mg/kg 体重以上投与群で尿量減少、それに起因すると考えられる尿中 Na,Cl 排泄量の減少。 2000mg/kg 体重投与群では採尿中に 4 例死亡。

- ・全て強制経口投与した。
- ・検体はオリサストロビン原体を用いた。

9. 急性毒性試験

オリサストロビンの CD ラットを用いた急性経口毒性試験、Wistar ラットを用いた急性経皮毒性試験及び急性吸入毒性試験が実施された。急性経口 LD₅₀ はラットの雄で 356mg/kg 体重超、雌で 356mg/kg 体重、経皮 LD₅₀ はラットの雌雄で 2000mg/kg 体重超、吸入 LC₅₀ はラットの雄で 4.12mg/L、雌で 1.04mg/L であった。(参照 15~17)

代謝物 F001、F033 及び F049 の CD ラットを用いた急性経口毒性試験が実施された。

LD₅₀は、いずれもラットの雌雄で800mg/kg体重超であった。(参照18~20)

10. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性

ニュージーランド白色ウサギを用いた眼一次刺激性試験及び皮膚一次刺激性試験が実施された。眼及び皮膚に対する刺激性は認められなかった。(参照21~22)

モルモットを用いた皮膚感作性試験(Maximization法)が実施された。皮膚感作性は認められなかった。(参照23)

11. 亜急性毒性試験

(1) 90日間亜急性毒性試験(ラット)

Wistar系ラット(一群雌雄各10匹)を用いた混餌(原体:0、300、1000、3000及び5000(雌のみ)ppm:表6参照)投与による90日間亜急性毒性試験が実施された。

表6 90日間亜急性毒性試験(ラット)投与量一覧

投与量(ppm)	性別	300	1000	3000	5000
検体摂取量 (mg/kg体重/日)	雄	22	73	215	
	雌	25	81	234	385

5000ppm投与群の雌で体重増加抑制、小赤血球数の増加、血清中マグネシウム量の増加、副腎の体重比重量(以下「比重量」とする)の低下、十二指腸壁肥厚、肝臓の変色(暗褐色)、腎臓の褐色色素沈着が、3000ppm以上投与群の雌雄でアルブミン量の増加が、雄で血糖値の低下、脾比重量の減少、腎臓、精巣及び心臓の比重量の増加、小葉中心性肝細胞肥大、腎臓の褐色色素沈着及び好酸性小滴が、雌で摂餌量の減少、HGB²、MCHC値の減少、プロトロンビン時間の短縮、血清中塩素量及び総ビリルビン量の減少、SGGT値及び血清中カルシウム量の増加が、1000ppm以上投与群の雄で体重増加量抑制傾向、摂餌量の減少が、雌でMCV、MCHの減少、総タンパク量、コレステロールの増加、肝比重量の増加、びまん性肝細胞肥大が、300ppm以上投与群の雌雄で十二指腸の粘膜肥厚(300ppmでは有意差なし)が、雄で総ビリルビン量の減少が、雌でグロブリン量の増加が認められた。

本試験では、無毒性量が求められなかった。(参照24)

(2) 90日間亜急性毒性試験 追加試験(ラット)

Wistar系ラット(一群雌雄各10匹)を用いた混餌(原体:0、30及び100ppm:表7参照)投与による90日間亜急性毒性試験(追加試験)が実施されたところ、オリサストロビン投与による影響は認められなかった。

² 検査値等の略称は別紙2を参照(以下同じ)